

---

# スゴク好きだった…。

華恋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スゴク好きだった…。

### 【NNコード】

N5447A

### 【作者名】

華恋

### 【あらすじ】

これは実際にあったモノです！けれど登場人物とは全く関係ないものデス。高校最後の年に、いろんな経験をした女の子の甘くつて辛かった子の話デス。

アナタヒタタシとの出合 ( 運動会 )

初めて書くので心配ですが読んで下せこ 三

## アナタヒアタシとの出会い

ねえ…。アタシは夢をみてるのカナ?こんなコトが起こるなんてアタシは思いもしなかつたんだよ。

アタシ(中川奈美)は、もういつの間にか高校3年になつてた。本当にアタシは、まあうるさいケドごく普通の生徒だと思う。別にハツキリ言つて美人じゃないしスタイルも良くない…。だからアナタとこんな風に近づいてくなんて。今から思い返してみてもアナタはアタシにとつて遠い人だと思う。

それは入学して間もなかつたケド髪を茶色にして制服を自分なりに着こなしていいるアナタが居た。

まあー。都立高校だから当たり前だけど、その時は誰よりも、それが似合つて居て凄いオシャレな子で格好良いなー。って思つた! それからアナタの事は、隣のクラスだから、よく見かけたし…。何よりアナタは学校で目立つグループに居たから、きっと誰もが知つてたと思うんだ。でも学校の問題児のグループだけどアタシは嫌いじゃない。だつて話せば皆、良い子だし気さくに話してくれる人ばつかだつた。けれどアタシとアナタは全く接点は無かつたから話さなかつたね…。うん。それはアタシにとつてアナタは、何だかスゴク遠い人に思えてならなかつた人だつたと思うんだ。スゴク…スゴク…

## 同じクラス

アタシの高校生活は、中学の時に思い描いた派手なものはなかつた  
ケド毎日が楽しかつた。

『奈美いー！帰ろう！』 そう言つて近づいたのは親友の佐藤香奈だ  
つた。香奈とは3年になつて仲良くなつた。クラスのグループは6  
人だケド香奈とは特に仲良かつた。香奈は漢字とか難しい言葉が苦  
手でボケボケしてるケド誰よりも優しくつてアタシの変化に気付い  
てくれる子だつた。アタシとゆうと、まあー。何とゆうか結構ハツ  
キリものを言うタイプでギャルみたいに目立つんじやなくつて皆と  
騒ぐのが好き！つて感じだつた。

香奈とマックで寄り道をした。そしてアタシ達は、この年頃の子  
の話をした。『奈美いー。イイ加減彼氏が欲しい！』

『アタシもだよー！』 つてな話をしてたケド実際、香奈はアタシが  
見ても可愛いと思う。でもアタシと似てバカキャラで妄想族だつた  
(笑)だから出来ないのカナー。つて思つてたら香奈が『でも今回  
のクラス結構』格好良い人とか居るよね！』 つて言つてきた。『確  
かに…楽しくはなりそうだね！』

『奈美は誰が格好良いと思う？』 アタシは、ちょっとと考えて…『戸  
川隆力ナ…。でも、まあー住む世界が違うからね！』

『アタシもそう思う！戸川君なんかガラ悪そうなグループに居るケ  
ドそこまで騒がずクールっぽいキャラだよね！つでオシャレさんだ  
よね』 戸川君は首席番号順でアタシの前の席だつた。いつも音楽聞  
いて寝てばかりで女の子とは話さない人だつた。いつも…また寝て  
るし つて思う程度の人だつた。

今、アタシと香奈は放課後の教室でノートを見せ合つてた！…そう…

3年初の中間テスト前が近づいてる。

考えるだけでも頭が痛い。

でもアタシは英語以外ならノートはとつていたので香奈にノートを見せてあげてた。

アタシは同じグループで学年でも頭が良いメグに英語を教えてもらつてた…。

『メグ～。駄目つつ！アタシ英語はマジ出来ない！ノートは写せないからコピーさせて！』メグは嫌な顔せず『いいよ！でも絶対勉強するんだよー？』『わあーい！メグ大好き』そして香奈も『アタシも奈美とメグのコピーさせてえー！』つて叫んだ。アタシは笑いながら『嫌じゃ！』つて言つた。香奈は『ええ～？ヒドイ！』つて言いながら笑つてた。そしてアタシ達は帰り際にコンビニによつてコピーしに行つた！そしたらコンビニの前にはタツチャンが居た！タツチャンは目立つグループの一人だけ癒し系キャラで2年から同じクラスで仲良かつた！

『タツチャン！やっぱタツチャンもコピー？』『おう！でも、ナツチャンもだろ？ちゃんとノートとれよ！笑』アタシはチラツて横を見た…。戸川君が居た。でも気にせずタツチャンと話した。『失礼な！コピーするのは英語だけダヨ！あとは完璧だもん』そしてタツチャンは目をこれでもかつ！つてくらい見開き『マジつ？ナツチャン！コピーさせて！奈美様お願ひ！』アタシと香奈とメグは大爆笑した！

そしてイキナリ横から戸川君が『俺も良いかな？』つて言つてきた。ビックリした。別に断る理由もないのOKした。たぶん話したのは初めてだった。あまりアタシは人とは壁は作らないケド、アナタは違つた。壁じやないケド…周りとは違う雰囲気を持つたアナタが

アタシをねじられたんだと嘆く。

## イキナリのメール

香奈とメグと、その場を離れ…振り返るとタツチャンは手をブンブンと振り戸川君はペコリと頭を下げていた。

しばらく歩いた後、3人は『ビックリしたあー』って声を揃えた！

アタシは何食わぬ顔をしてたけど心臓がバクバクいってた。それは恋とはまだ違う…触れてはいけないモノに触れてしまった感じだつた。でもただ、それだけの関係だつて分かつてた！だつてアナタには可愛い先輩の彼女がいるんだもん。それでも、やっぱ普通の友達になりたいって思うのは欲張りですか？

アタシの中でスゴク遠い人は相変わらず遠いけど何だか目を離せない存在になつたのはコレがキッカケかもしねない。

その日、タツチャンからメールが来た。『ナツチャン！ノート有難う。隆<sup>じゅう</sup>も言つてた』って入つた。少し、メールをして、寝ようとしたら知らないアドレスからメールがきた。

『こんばんはあー！アドレス鈴木から聞いたやいました！』鈴木つてのは同じ高校の男で幼なじみだ…。つで内容の続きは『…ノートありがとう！戸川隆でしたあ！』『エッ？』アタシはかなりビックリした！メールでさえ驚きなのに何コレ？何でこの人…弾けてるの？って思った。そしてアタシは何だか可笑しくって笑つた。お母さんがそれを見て『気持ち悪い』って言つた。アタシは、ちょっと考えてから返事を送つた。

『さつきタツチャンから戸川君の分のお礼を言われたよ！なのに、わざわざメール有難うね』

そしたら直ぐに返事がきた。

『達也にアドレス聞いたら俺が送るから良いつて言われたから鈴木に聞いたんだ！迷惑だつたらゴメン！』って入つてきた。たぶんタツチャンはアタシが誰とでも仲良くなれるのに戸川君と壁を作つてから苦手なんだろうと思つて気を利かせてくれたんだと思う。そ

してアタシ達のメールは、この日を境に始まつたんだよね。

次の朝…ゆっくりと目が覚めた。そしてもう一度、携帯のメール画面を見てみる。やっぱり知らないアドレス戸川君からメールがきていた。。

『やっぱ夢じゃなかつたんだ…』

『ハツ？何言つてんの？奈美つ学校遅れるよ？また遅刻する気なの？』お姉ちゃんの声でハツとすると学校の準備をした。けれどやっぱり遅刻をしてしまい…先生に『奈美ー！またかあ？』って言われ『まあまあ…今度デートするから許して！』って言つてペロッと舌を出して誤魔化した！周りも笑つたので場は和み怒られずに席につけた。前の席は相変わらず眠つてた…。アタシ本当にアナタとメーるしてたあ？不思議でたまらない。だつて実際アナタはクラスでもタツチヤンしかあまり話さない…。正直言つて、アナタからは近寄んなオーラが出てると思う。

でもアタシは別に嫌いじゃない。まあ好きでもないケド…。だけどココは女子高生！心の奥でミーハーなアタシは、友達になれるなりたいな…って思つてた。これは誰にも言えなかつた。本当に好きとは違うケド気になる存在…。恥ずかしかつたんだと思う。ずるいアタシが居た…。

けれどコレだけは好きだなあー。って言えるのがあつた。アナタの左手には指輪が光つてた…。そう先輩とお揃いの。確か長かつた氣がする。だから好感が持てたのかな？何かあまり女の子と話さないアナタが彼女を大切にしてるんだなあー。って思つて。良いなつて思えた！アタシにとつて憧れるカップルだつたんだよね…。

## 変わらない距離

休み時間になつた…相変わらずアナタは寝てる。何しに学校に来てるのかなあー。つてボンヤリと考えたら香奈・メグ・花・由美・美香がやって来た。仲良しちゃーだつた。

『奈美いー。次、移動だよ?早く準備して!』

『はいはい…。香奈は忘れ物してないの?』つて言いアタシはアナタが気になつた…。香奈達が少し歩き始めていた。そして起こしてあげるべきか否か…。だけど、やっぱ起こしてあげないとね。『戸川君…ねえ戸川君つてば!』『…つ…！…エッ?中川サン何?』すんごいビックリしてるし。アタシは可笑しくって笑つた…。それを見てアナタも少しだけ笑つた…。『次、移動だよ 迷惑だつたかもしぬないケド起こしちゃつた!じゃバイバイ』

そして直ぐアタシは香奈達のトコに向かつた。後ろからあまり大きくはないケド『有難う…』つて聞こえた。アタシは振り返つて手で丸つてして笑つた…。香奈達は、ビックリしてた。『よく戸川君、起こせたね!しかも話せてるし!』香奈にも、何となく戸川君とメールしたのは言えなかつた。

『うん…この前、ノート貸したし何となくね。戸川君は、あのグループでも特に何だか近寄んなオーラ出てたケド意外にそうじやなかつたみたいだし!』でもアタシは、まだアナタとこんなにも近くになれるとは思つてなかつたんだよ…。別に昨日のメールしたからつてアタシ達の関係は変わるもんじやかつた。だつて住む世界が違う気がしてならなかつたから!学校に居ても話す内容ないし…。まあ話さなくとも今までと変わらないつて思つてた。

でも何でかアナタの違う一面が見れた気がして興味が出てきた。

それでもアタシ達は別に廊下をすれ違つても、お互いの友達と話していく日も合わせなかつた。やっぱり何だか遠い存在な気がしてならなかつた。少し距離が近づいた気がしたケドやっぱりそれは、違

うんだって思えたら淋しかったんだよ..。アタシは何て勝手なんだ  
ろうね。ねえ戸川君..本当のアナタは、どんな人ですか?

## ギャップ

この日は、真っすぐ家に帰った。もうすぐ中間テストだから嫌々、仕方なく勉強をする事にした。

間もなくして携帯が鳴った。アタシはきっと香奈からだらうって思つてた。それは、予想もしないアナタからのメールだつた。

『こんちわあーー意味もなく甘栗むいちゃいました。戸川でえーす！』

『ハツ？！何これ？意味不明なんだケド？』

アタシは頭の中が真っ白になつてしまつたんだよ！だつてアナタがこんなメールをするなんて思つてもなかつた。とりあえず簡単に返事を送つた。

『つてかウケる！笑』

ちょっとしてから、またメールがきた。

『ねえ知つてる？ガチャピ\*とムツ\*の秘密！』

んつな事、知らないし…。本当に笑えた。アタシは今までのアナタの印象をブチ壊さなければいけないみたい。だけど、それは…きっと周りもそうだと思う。あまり誰とでも話さないアナタ…近寄りがたいアナタ…。誰もが今のアナタを想像は出来ないよ。そんなアナタのギャップにアナタは今、ハマッてしまつたんだと思う。

その後も少しメールのやりとりをしてから勉強を再開した。けれど全く集中できなかつたんだよ…。何度も何度も携帯の受信画面をみてしまつたから…。

だけど次の日からアタシは、アナタにノートを貸した手前、悪い点数がとりたくなかったから一生懸命勉強をした。おかげで、いつもより成績が良かつた！（笑）

アタシは勇気を出して学校で話を掛けた。

『ねえ戸川君…テスト出来た？ノート分かりづらかった？』アナタは申し訳なさそうな顔をしてアタシを見たよね！『ノートは見やす

かつたんすが俺が馬鹿だから赤点ギリギリッス！中川サンに申し訳ないッス』だつて…。でも、どうやらいつもよりは良い結果だつたみたいなので安心した…。つてかギリギリもどうかと思つケド少しでも役に立てたなら良かつたつて思えた。

## 消えたもの

中間テストが終わってアタシ達は、そこまでメールはしなくなつたケド相変わらずアナタからのメールは、ぐだらなくつて笑えた…。でも学校ではあまり話さなかつた。だから今だに、本当にアナタとメールしてるのが分からなかつた…。実は違う人なんじやないかつて疑つてしまふアタシが居た。

そして…しばらくしてアタシは氣付いてしまつた。相変わらず朝から学校に來ても寝てるアナタの左手から消えてるものがあるつて事を…。けれど、まあ…ただ単に忘れてきたのかも知れないしアタシは聞かなかつた。それを聞いて、どうこうしようとも思わなかつた。それにアタシはアナタと先輩カツプルが理想だつたから。上手く言えないケド複雑な気持ちでいつぱいだつた…。

…自分の気持ちが分からなつて変ですか？それとも、今のアタシがお子様だからなのかなあ？きっとアタシくらいの子は、みんな自分の気持ちをそれなりに理解してんんだろうね…。

何日かして携帯が鳴つた…。いつもと違つたのはアナタからのメールじゃなくつて電話だつた。正直アタシは電話があまり好きじやなかつた。氣心知れた子なら平氣だけど電話は何だか緊張をしてしまふから…。このまま気付かなかつた事にしようと思つてたケドあまりにも長く鳴り続けるのでアタシは重い手を伸ばして電話に出た。

『…はい』

『…つ…』

『もしもし？』

『戸川ですケド今、平氣ですか？』

『うん。平氣だよ！どうしたの？元氣ないね…』

あの時アタシは、流れのまま、そう聞いたケドあまり聞きたくなかつた気がする。

『実は 彼女と別れたんだよね』

……。アタシの頭が、ぐらんと揺れた。スゴク鈍く……。何だか気持ちが悪かったのは今でも覚えてる。やつぱり聞くんじゃなかつた……。言葉をなくした。

『もしもし?』

アナタからの声で止まっていた思考回路は再び動き出した。『エッ? あつ……。『ごめん。大丈夫なの?』

『うん。まあ最近そんな感じだつたんだ。それに、あつち何度か浮気もしてたんですよ……』

『そりなんだ……』

『結局、俺ふられちやつたみたいですね』

『戸川君は それで良いの? 今なら間に合つかもよ?』

『……はい。へ口むけど仕方ないツス』

『何て言つたら良いのか分からぬケド元気だしてね! アタシ話だけなら聞けるよ……』

知らなかつた……アタシから見たアナタ達は本当に素敵なカツプルだつたから。。

言えないんだよ。

次の日、香奈がアタシのトコに来た。

『戸川君…やつぱり別れたんだつて！』

『あつ…うん。 そうみたいだね。』

『エツ？ 知つてたの？ なあーんだ！ つまんないの〜』

・・・・・。

『でもさあ〜。 奈美はショックなんぢゃない？ あの二人いいなあ〜。 つて言つてたじやん？』

『うん… ショックだつたし複雑だつた』

『だけどウチらも早く春が来て欲しいねえ〜』

『つてか後、2カ月くらいで夏だし！』

『ちつがーう！ そうゆう意味ぢゃないし！ 笑』

『はいはい！ 分かってるから』

そんな話をずっとしてた…。 アタシも彼氏は、ずっと居なかつたし、それに高校生活最後の年だから今年の夏こそは花火大会とか行きた  
いって思つてた…

今年は誰かと行けるのかなあ〜。 つてボンヤリと考えてた。 そして香奈が、『 そういうえば奈美つて最近… 戸川君と仲良いよね！』 心臓が飛び上がる位… ビックリした。 アタシは平静を装いつた。

『別に普通ぢゃない？ 必要以上話さないケド』

『でも他の子なんて全く話さないじやん！ 良いなあ〜』

『つてかタツチャンとかのが仲良いし！ 香奈も話掛けてみたら？ 意外と普通かもよ！』

『エツ？ 無理！ 恐いじやん。 だけど奈美とのは何か違つ氣がするだよね…』

『変わらないよ…』

『ねえ奈美… 何かあつた？』

アタシは、いろんな感情が入り交じつてイライラした！

『別に何もないし！』

『そりなんだあ？』

うん。本当に何もない。むしろ他の男の子のが仲良いしアタシはアナタの事、全く知らない。だからアナタの事ペラペラと他に話せない。話せる立場じゃない…。話せる立場じゃないんだよ？だって別にアタシとアナタの関係は何も変わらないじゃない？

それからアナタから毎日、メールがきた…。内容は、いつもくだらなかつた氣がするケド乐しかつた。

そしてアナタの新しい発見をすると純粹に嬉しかつた！そしてアナタはバンドを組ん出てボーカルをしてるつて…メールだと二人とも何でも話せたね？！本当に新しいアナタを見つけるたび嬉しかつた…。

アナタは自分のコトを一生懸命アタシに教えてくれたね！でもアタシはダメな奴なんだ。

アナタのコトは、いーっぱい知りたいつて思つてるのに知り過ぎるのが恐かつたんだ。アナタしか目に入らない氣がしてきて。。。だから反対に学校じゃ話さなかつたのは、せめてもの救いだつたかもしない…。ケド少し目が合うとお互い微妙に笑い合つたね！アタシは胸が苦しかつたケド何だか温かい気持ちになつてた…。アタシ達の微妙な距離感…

アナタの本当の気持ちは何ですか？

近づくアナタ…距離をとろうとするアタシ…

本当にアナタが分からなくつてアタシは自分自身からアナタ自身から逃げてた。

そんなアタシはダメな奴です…ずるい奴なんです。

だけどアナタから見たアタシは、どんな風に見えたの？神様…アタシは臆病な奴なんです。目で彼を追つてしまつ自分を認めたくなかつた…。誰かに話してしまつたら、もう止められないと思つた。アナタに近づきたいケド近づけないアタシ…。こんな住む世界が違うアタシがアナタに近づいちやいけないと思つてたの。。。バカだと思つだらうケドこれが当たり前だと思つてた。

『奈美いー。もうヤダ！…つい、この前も中間だったのに、もう期末だよ？有り得なくない？』

『本当だよね！超一ヤダあー！別に、こんな方程式とか今後の人生に必要ないし…』

あー。ヤダ！何でこんなに毎回テストしなきやいけないだろ？順位も発表されて…別に出来が悪かつたってダメな人間なんて居ないじゃない！むしろ、よくニュースとかでも眞面目な人が犯罪を犯してるってコトをよく曰にする…。

分かってる！こんな風に思つてる自分は今、この現状から目を背けてるつてコトも…。でも学校に居るガラの悪い人達もハメは外し過ぎちゃうかもしれないケド皆…良い人達なんだよ？それを大人達は認めない！おかしいよ…。何でもっと一人・一人を見てあげれりんだろう。それは前から思つてたコトだけどアナタを知つてから余計そう思つようになつてた。

そして期末が近づくにつれて、やつぱりアナタが学校でも近づいてきた…。でもスゴク戸惑つた感じだつたね。まあー。仕方ないカア！アタシ達6人グループが居る中を勇気出して来たんだもんね。アタシはアナタのその姿が可愛くつて嬉しかつた。

『あの…中川サン申し訳ないんだケドまたノート貸してくれませんか？』

『…（笑）…ハイ！こんなノートで良ければ…』

『有難う…じゃ中川サンが平氣になつたら貸して下さい…』

『うん』

そしてアナタは満面な笑みをしてくれた。アタシの胸は、いっぱいになつたんだよ。。。

『ちょっと…ちょっと奈美？何？今の戸川君だよね？あのクールな！でも今、可愛かつたんだケド！』

メグが言つた…そしてみんなもビックリしてた。そんな中、香奈だけが何もなかつたように勉強してた…。

その帰り香奈と一人で帰つた

『ねえ奈美？もうそろそろ話してくれても良いんじゃない？』

香奈が何を言いたいか分かつた…。だけどまだハッキリと自分の気持ちが分からなかつたし分かりたくないなかつた…。けれど香奈は特別な存在だつたから、戸川君とメールをしてるつてコトを話した。

『じゃ奈美は戸川君のコトどう思つてるの？』

『分からない…。今は正直、分かりたくないんだ。でも田で追つてしまつのは確か…』

『うん…そつかあー。分かつた』

『戸川君だつて、ただ前後の席だから言つてくるだけだと思つし』

『うーん。それは違うと思うよー…でも話してくれて有難う。また何かあつたら聞くから…』

『ずっと黙つててゴメン』

『別に良いよー…奈美もゆつくりで良いから、自分の答えを見つけな』

香奈はアタシに、そう言つて優しく見守つてくれた。

香奈…有難う。アタシはアタシなり焦らず答えを出していきたい。恋に臆病なアタシの精一杯…頑張るから。

## ナツチャン

期末も無事に終わって球技大会が始まった…。アタシはバスケ部だつたから、もちろんバスケを選んだ。そしてアナタも中学の時バスケをやってたから同じだったね…。

試合前、アナタとすれ違った時アタシは勇気を出して『頑張って!…』って言おうしたんだよ。だけどアナタと目が合った時スゴク緊張しちゃつたし周りも、いっぱい居たから言えなかつた…。何よりタツチャンが凄いテンションでアタシ達は、苦笑いしちゃつたね…。『ナツチャン! まじ俺ら勝つから応援ヨロシク! 本当、女の子のハートをガツチリ掴むんで!』

『タツチャン! 気合い充分じゃん! それに、そんな事しなくっても人気充分だよ!』(笑)

『マジい? こりやもん格好悪いトコ見せらんねえーなー!』

『ハイハイ! 分かったから。もう試合だよ!』

『本当だ! 行くぞ! 隆ツツ!』

あつ…行つちゃつた…。タツチャンは嵐のよつな人だなあ。

『奈美いー! 男子の試合始まるよ! 早くつ』

『うん! 今、行く』

香奈が特等席を取つて待つててくれてた…。アタシはアナタの活躍をココで応援しているよ! アナタはアタシの存在に気付いてくれるかな? ううん…。こんなに、いっぱい居るし気付かないかもね。。。試合が始まつて、両チームとも引きを取らなかつた…。タツチャンやアナタの活躍を見るとスゴイ興奮した! 普段はダルそうに受けている体育の授業なのに全然違うんだもん! (笑)

周りの女子達も超一興奮して応援してた。でも、そんなのも真剣にプレイしてるアナタには届かないのかな? 本当に良い試合でアナタがシユートを決めようとした時アタシは思わず…。

『戸川君ツ頑張つて!』

ナッ…？！

一瞬アナタの目線が、こっちに向いた気がした…。ちつ 違うよね？うん。絶対、気のせいにだよ…何だか、それから試合に集中出来なかつた。

夜、アナタからメールがきた。

『今日は応援有難う！嬉しかつたテス』  
やつぱり気のせいじゃなかつたんだ…。顔が熱くなつてしまつた。

『聞こえたの？』

『うん。ちゃんと中川サンの声が聞こえたよ…』

『そつか…何だか恥ずかしいな』

『いや！本当に嬉しかつたッス！あと俺もナッチャンつて呼んで良い？』

『うん…』

『じゃ、ナッチャンお休み』

『お休み…』

アナタは、するこです…アタシの顔は熱くなりすぎてヤバかつた…。

## 認めたくない

昼休み、アタシと香奈はホールでお弁当を食べてた。

『香奈…何だか分からなくなってきたよ』

『エツ？何つイキナリ？』

『戸川君』

『何でえー？戸川君、奈美にスゴいラブ光線じゃない？それに奈美だって好きなんじゃないの？』

『いや 戸川君がアタシみたいな子スキにならないよ。やっぱり…でも戸川君の考えるコトが分からぬの』『奈美…うん分かるよ！もしアタシが奈美の立場だつたらつて考えると分からぬよな』

…。

『けれど奈美あのサア…。自分のコトは分からぬケド第三者が見れば分かるつてコトあるじやない？だからアタシから見た戸川君と奈美は良い感じだよ』

香奈のこの言葉はスゴク優しくつて温かくつて胸に染みた…

けれど、それと同時に言いようのない不安で押し潰されそうになつた。

アタシは自分に自信がない…。

取り柄なんつて言つたら元気だけ…可愛くもないスタイルも良くない。なのに、あんなオシャレで格好良いアナタがアタシをスキなんて考えられないんだよ…。それに、つり合つハズないよ…もし、これでアタシがアナタを好きになつてゲームだつた。本気とした？つて言われたら立ち直れないよ…。だから素直に自分の気持ちを受け入れられない…。正直 自分の気持ちは認識しているよ。けれど、それは心の奥底に閉まつてゐる。だつて言葉に出してしまつたら、もうアタシの気持ちは止められないもの…。だから恐い。。。アナタにハマッてしまつ自分が本当に恐いの…。バカだと思つよな！けれ

ゞコレはアタシの中で変な意地になってしまったの…。ちやんとア  
ナタの気持ちがハツキリ分かるまで好きとは言わない。好きだって  
認めたくないって…。

アタシ達の学校は9月に体育祭がある。そして夏休み間近に応援団が募集された。

『ねえ！奈美ツ もち絶対ヤルよね？』

『うん！もちろん！だつて高校生活最後の体育祭だしつ』

『だよねえー。だつて今まで前の先輩達が問題起こして、なかつたもんね！』

そななんだよね…。何年か前の先輩達が問題を起こして伝統的な援団は行なわれなかつたんだよね。スゴい迷惑な話だよ！だけど今年から3年生がメインで1・2年生は少人数での応援団結成が認められた。

放課後、体育館に援団希望者が集まつた。アタシと香奈は職員室に用事を済ませてから体育館に入った。遅れたから、そーっと入ろうと瞬間…お決まりのように。

『おおーい！ナツチャン！ナツチャン達もやるの？』

…タツチャン。こんな後輩や大勢の前で叫ばないでよ…。しかもメツチャ立ち上がって手を振つてし恥ずかしいじやん！

だけどまあ…。いつものコトだし…仕方ないかあ…。

『ハイハイ！そんなバカは、ほつときな！奈美・香奈ど二でも良いから座つて！笑』

今回、援団結成を仕切る理恵が言つた。

理恵を中心に援団の内容や練習日程がいろいろ説明された。

『香奈！夏休み結構練習あるんだね！でも楽しそう〜』

『だよねえー！頑張ろう！これぞ青春だね』

『何それ！香奈マジくさいよ。いつの時代のドラマだよ？笑』

『まあまあ良いじゃないの！それより…戸川君もやるみたいだね！』

『そみみたいだね。何だかんだ目立つ人ばかりで面白やう…楽しみ！』

だな』

夜…メールがきた。アナタからだ。今日、メールがくる気がしてた。

『ナツチヤンも援団やるんだね！俺もやろうかな』

『えつ？やるんじやないの？体育館に居たよね？』

『達也達が行くぞ…って言つたから付いていったんだ。だから俺は悩み中なんだ』

『やうなの？やれば良いのに…思い出になるし他の人達と仲良くなれるよ？』

『じゃナツチヤンが言つなら、やううかな…ってか気付いてないかと思つてた…』

『何が？』

『全然、目が合わなかつたし見てなかつたから』

『キツとした…。うん、アタシはアナタと目を合わせなかつたから。』

『あつタツチヤンがスゴかつたから、そいら辺あんま見れなかつたんだ！ゴメンね』

『そうなんだ？達也ハズイ奴だよね！ナツチヤン慌てて可愛かつたよ…笑』

エッ？可愛い…？あつ！でも落ち着け奈美！コレは可愛いでも違う意味の可愛いだから気にしちゃダメ…！ダメなんだから…

『戸川君アタシをからかつてるでしょ…もう本当恥ずかしかつたんだから…笑』

『からかつてないよ！でも俺も、やっぱ援団やるよ…これからヨロシク』

『うん。ヨロシクね！お休み』

スゴいビックリした。可愛いもそうだけであえて見てなかつたコト気付いてたんだね…正直アタシも気付いてたアナタがアタシを見てたコト…気付かない振りをしてました。

そして、もう一つ気が付いた。アナタの言葉遣いが変わったコト…知らぬ間に距離は縮まってきたのかもしれない。

## 避けたくなかった

応援団のチームは「クラス」とだった。

だから同じクラスのアナタとは一緒にいたね……。

嬉しいような気まずいような気持ちで、いっぱいだった。

本当に上手く言えないんだケドやつぱりアナタはスゴクスゴクお子サマだったんだと思う。

アナタと田が合った度に「キッ」として息が詰まりそうになつてた……。変だよね?今まで、こんなコトなかつたよ!昔は……昔つて言つても、そんな昔じゃないケド田が合つても『あつ、田が合つちゃつた……』つて思つても何となく田を逸らすコトが出来たのに今は、それすぐ出来なくつて胸が苦しくなつてしまふんだよ……。だからアナタは、パニック寸前だつた!極力見ないようにしてた……。田が合つてしまつたら変に田が泳いでしまつた。そんな自分が恥ずかしくつて意識したくなかったんだよ……。でも、アナタのコトは、何でも知りたかった。。。けれど本当に常に想つてたのはアナタがアナタに近づくにつれてアナタは苦しくなり前の方がスゴク楽しかつた。つて思つちゃうんだ。でも本当に避けたかった訳じやなかつた。。。でも知らず知らずにアナタと距離をとろうとして結果的に避けるようになつてたんだね。本当に「ゴメンね……。こんなアナタだつたから嫌な思いをさせてしまつたよね……。アナタは、こんな風にしたかつた訳じやなかつた。でも、どうしたら良いか分からなかつたんだ。呆れちゃうよね……。

朝方、携帯が鳴つた

『「じんな朝にメールして「ゴメン」俺、ナツチャンに何か嫌なコトしちやつたかな?しちやつたらマジで「ゴメン」でも勘違いなら気にしないで!!』

違つよ…。戸川君。アタシが悪いんだよ！でも今の気持ちが言えないんだ。『ゴメンね…。本当にゴメンナサイ。

アタシは返信した。

『違うよ！ただ最近、バイトやら家とかで嫌なコトあって…だから気にしないで！何か心配させでゴメンね』

なんてアタシはズルイ奴なんなんだろう…。何で、こんななんなりう…。自分が嫌でたまらないよ。

## 避けたくなかった（後書き）

だいぶ間があいてしまってスイマセンでしたーこれからも読んで頂けたら嬉しいデス！

## お誘い

もう夏休みに入る頃も相変わらずアナタからメールが入ってきた！

『ナツチヤン！もう夏だよ？俺マジで夏好きなんだ』

『アタシも好きだよ！思い出いっぱい出来るしね』

『だよね！海とか行きたくない？』

『ゲッ…無理！スタイル良くないし、ましてや戸川君に見せられない

…。

『水着は恥ずかしくって見せられません！笑』

『エッ？いいじゃん！行こうよ！』

『でわ、いつかね！』

そんなこんなで海やらプールやらの誘いがスゴかつたけど苦しい言い訳をして乗り切つていった。

けど戸川君は、めげずに今度は違う誘いをした。

『海の日に横浜で花火大会があるから行かない？』

……。どうしよう。けど行きたいけど一人は緊張するから行けない。相手がタツチヤンとかなら気兼ねなくいけるのになー！やっぱ無理ッ！

『戸川君ならモテるから一緒に行つてくれる人いるでしょ？アタシと行つても迷惑かもよ』

『そんなコトないよ！そしたら鈴木も入れて3人で！』

んつなムチャクチャなあ～。確かに鈴木はアタシの幼なじみで問題ないケド…。あつ もしかして誰か女の子誘つて欲しいのかな。 そうだよね…。アタシなんかじやダメなんだよ。 どうしてアタシは自信が持てないんだろう。嫌な自分がいる…。でも、とりあえず聞いてみよう。

『じゃ、もう一人…女の子誘う？』

『そりだね！ナツチャンも、そっちのがいいよね！』

『もし気になる子が居るなら誘うケド』

『全然だれでも平氣』

『ううううう…。その日、香奈はバイトだつたし他の子には、まだ言える状況じゃないし…。ましてやアナタのコトを好きになりそうで不安だよ…。何か今のアタシはスゴい嫌だ…。まともに友達も信じられなくつ…。けれど、それくらいアナタは素敵だつたんだよ…。』

しばらく考えてアタシは今は違うクラスだけど1・2年、同じクラスで仲良かった歩を誘うコトにした！歩なら安心だし誰とでも気軽に話せるし何より信頼しきつていた。

## 歩

アタシは歩に電話した。

『もしもし歩？イキナリなんだケド海の口に戸川君と鈴木の4人で花火大会行かない？』

『エッ？行きたい！』

『良かつた！じゃ約束ね！あと周りには、あまり言わないで！何かつぶさうだから』

『分かつた！でも奈美い…何でこのメンバーなの？』

『やつぱり…そこへくるよな。困ったな…。』

『うん 実は戸川君に最近、誘われる口トが多くって今回もそんな感じ！』

『もしかして奈美と戸川君つて付き合つてるの？マジ？』

ああ～。歩の暴走が始まつたし…でも歩は信用出来るし何も知らないから言わないとダメだよね。

『違うよ。たぶん友達としてだと想つ…』

『そこの？でも戸川君は、あまり女子とも話さないし、そんな人には見えないケド…』

『まあ 良いじゃんー!へん。あんま良くないか…』

『…ふつ…何ッ 一人突っ込みしてんの?』 (笑)

『歩いー。明日さあ家に行つても良い? いろいろ話したいし歩の家にも久々に行きたいからサッ』

『うん! 別にイイヨー! ジャ明日、一緒に帰ろ!』

『じゃまた明日ね! オヤスミ』

『うん オヤスミ』

…歩に上手く説明出来るかな…? でもちやんと話せば分かつてくれるよね…。でも、また誰かに話すコトで自分の気持ちが大きくなっちゃうのが恐いよ…

次の日、歩の家に行つて 今までの経緯やアタシ自身の気持ちを伝えた。歩は、そうゆう話にはスゴい落ち着いて聞いてくれるし歩の考えもしっかり言つてくれる子だつた。本当に何だか上手く言えないとケド本当に違う雰囲気を持つ子だつた。歩なら信用も信頼も出来ると思った。だから花火大会に誘えたんだと思う。本当に歩は良い子だつた。アタシは本当に良い友達に恵まれてると思つた…。

## 待ち合わせ時間

次の日、香奈とマックで『飯を食べてた。

『奈美、ゴメンね！一緒にに行けなくつて。あとアタシたぶん・バイトなくつて一緒に行つてもダメな気がするんだよね』

『エッ？何が？アタシは香奈が一緒にでもダメとか思わないよ』

『うーん。アタシさつ！たぶん慣れた男の子じゃないと話せないからサッ』

あー。そうゆうことね！確かに香奈は明るいけどどんな男の子とも話すイメージは無かつた。

『そんなの気にしなくつて良いのに！アタシもメールとかするけど学校じゃあんま話さないよ！（笑）同じ』

『あはは！大丈夫だよ。奈美は一応メールとかしてるし川君が頑張るハズ！花火大会の結果聞かせてね！』

『うん！帰つたら即効ツツ連絡するから』

とつとう花火大会マヂあと少しどとなつた…。

アナタから夜、メールが入つた。相変わらずドキドキしてしまつアタシ…。何も進歩してないなあ。。。

『ナツチャン！花火大会、一緒に行く人決まつた？』

『うん。歩が一緒に歩いてくれるってー。』

『歩サンかあー。あの子なら誰とでも気がねなく話せそうだねー！良かった』

エッ？ やつぱ戸川君は、わづみうつ子が好きなのかナ…。嫌だ また自分の汚い部分が溢れてくる。西わなくつて良い事も言つてしまふ。『戸川君、もしかして歩独りだつたりしてー。それなら、そうつて言ってくれたら良かったのに…』

あつ…送つちやつた。返事が恐い 。ビリビリのまま電源切つちやおつかな…。

でも直ぐさま返事がきた。アタシは恐る恐るメールをみた。

『違うよー。そんなんじやないよー。俺、女の子と話すの苦手だから、そつゆう子なら安心つて意味』

『やうなの？別に隠さなくつても良ーの』

『本当に違うよ。俺、ナツチヤンが居ればスゴい楽しいし』

するー…またそつやつて不意打ちするし…。顔が熱すぎてヤバイ。 。でもね あんまりサラッて、そつやつ事を言わると素直じやないアタシはアナタにとつて、じつゆう言葉は、いくつ自然なもので特別な意味を持たないんじやないかつて思つてしまつんだ…。

『戸川君…アタシを買いかぶり過ぎテスー！何もあげないよ』

『あははー！そんなんじゃ無いよーあとサツ当田なんだケド凄い混むから朝から場所取りしない？』

『エツ？朝つて花火は夜からだよ？夕方からじゃダメなの？』

『横浜メツチャ混むんだ！だから朝、場所取りして取つたらプラつこつよー！それにせつかくだつたら良い場所でみたいじゃん』

『何時くらこ..』

『向こうで9時に着きたいから8時くらいに待ち合わせて行こ』

めちゃくちゃ早いんですケドー！何か笑えてくるし…。

『まあいいかー！せつかくだしね』

『じゃ、わゆう事でー楽しみにしてるから』

そんな朝からアナタと居てアタシは肉体的にも精神的にも持つのか心配デス。。。でも、スゴい楽しみだな…。

## 花火大会当日

とつとつ…きちゃつた！花火大会当日。昨日は全く以て寝れなかつた。服とか超一悩んだ。あんまオシャレじゃないケド頑張つたつもり…。

携帯が鳴つた！

『ナツチャン？待ち合わせつて公園の入り口だよね？今、ドコ？』  
『ゲッ ヤバイ。鈴木からの電話だつた！同じ団地だから一緒に行こうとアタシが誘つたんだつた。』

『あつ、今行く！すぐ下だから！』

ダッシュで降りて目の前は公園…手を振りながら鈴木は待つてた。

『花火大会楽しみだねえ！でも俺、朝弱いから眠い…』（笑）

『うん。アタシも！戸川君のパワーがスゴクつて根負けしちゃつた』  
（笑）

『そだね。戸川君、ツツ走つたら止まんないもん！俺いつも振り回されてるよ～』

『そこのの？意外！アタシ、鈴木と戸川君がそんなに仲良いって思わなかつたんだケド！』

そんなこんなで待ち合わせの駅に着いた…。

戸川君が居た…。マジうける。メッシュ手を振つてるし。。。調子が狂う。戸川君 アナタはスゴク格好いい人なのに今は、スゴク可愛い人だよ？！目が離せない。アナタの目にもアタシは可愛く映つたりしますか？…。そんな訳ないか。

『ナツチャーン！二つちだよ！』

『ゴメン！早いね！待つた？』

『全然平気だよ！あとは歩サンだけだね』

『歩一つ前の駅だから、そのまま乗つてくるからホームでつてたよ』

『じゃ行こうか』

ホームには歩の姿があった。

『歩いー。』

『奈美ツツーあつ。こんにちわー高橋歩です。一人の事は奈美から聞いてるから大丈夫！今日はヨロシクねー。』

さすが歩ー。サバサバした感じで気持ちが良いー。もう溶け込んでる感じ。歩のおかげで楽しく過ごせるかもー

『じゃナツチャーン行こうか！』

『うん』

『ねえアタシ達も居るんだけ?』

『歩ッ!何、言つてんの?!みんなに言つてんだよ!』

『そりだよー歩サン!じゃ鈴木も行こうぜ』

最近の戸川君はアタシの前だと慣れた感じだったけどやっぱりあまり知らない歩の前だと女の子とあまり話さない?話せない?アナタになつて慌てた。

横浜、山下公園に着いて、結構~人が居てビックリした。でも良い席がとれた。

『時間もカナリあるし街をブラブラしちよつよ』

戸川君が言つた。すかさず歩が。

『良いねえー。奈美そうしよう!』

『だね。鈴木アンタも氣を利かせないとモテないよ』

『ガーン。ナツチャンそれは言わない約束じゃん!』

『ナツチャンつて鈴木に強いよね!』(笑)

『エツ?アタシ誰に対しても結構~強いよお』

『うんうんー奈美は実は性格ハードだったりするんだよ』

『うだよ。ナツチャンは優しいケド結構、強いんだよー！俺はちつちやい頃から怒られてたんだ』

戸川君はビックリしつつ口を開いた。

『いいなー。俺そんなナツチャン知らない…』

そして何だか不貞腐れた感じになっちゃった…。

男子つて難しい。

中華街に来て戸川君がカラオケに行こうって言つた。

## 花火大会当日（後書き）

だいぶ遅くなつてスマセンでした。これからもヨロシクお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5447a/>

---

スゴク好きだった…。

2011年1月28日05時42分発行